

# ローゼンクランツとギルデンスターン

山 際 巖

## (1)

コージンツェフ監督は彼の製作した映画『ハムレット』の中で「裏切られた友情」というテーマをかなり巧みに強調していたと思う。彼の演出方法をあれこれ思い出しながら、この二人の登場人物の性格と運命を考察してみよう。

彼らは子供の頃からハムレットと親しくしながら育った。プリンスのいわゆる「御学友」である。王妃の言葉によれば、ハムレットは彼女の前で彼らのことをしばしば噂していた (he hath much talk'd of you) し、ハムレットにとってこの二人の青年ほどなつかしい存在はない (two men there are not living To whom he more adheres)。しかも宮廷の中で現在完全に孤立しているハムレットの状態を考慮するならば、彼がこれらの旧友をなつかしむ気持は以前よりも募っていたはずである。ハムレットの彼らとの交際は、ホレイシオとの交際よりおそらく長かったであろう。だから第2幕第2場でハムレットが久しぶりに彼らに会うとき、その喜びは当然に大きい。彼らに挨拶され、意外な訪問に驚いて “My excellent good friends!” と言うとき、ハムレットの表情は喜色にあふれている。

しかしその後の対話はデリケートに進行する。まずローゼンクランツの「世間がまとも (honest) になってきました」という感想に、ハムレットが「では

この世の終りに近いな」と鋭く応酬するところから、会話は不愉快に軋みはじめる。「まとも」どころか、デンマークでは「笑顔を失わずに悪党たりうる」(one may smile, and smile, and be a villain) というハムレットの認識とこの二人は無縁である。「デンマークは牢獄だ」というハムレットの実感も彼らには理解できない。クローディアスの王位篡奪をも、ガートルードの背徳的な結婚をも、それらに承諾を与えた枢密院の決定をも、言い換えるなら時勢のすべての流れを、彼らは肯定的に受け入れている。体制に従わない者にとってその体制は牢獄であり、従うものはその体制の中で「自由」である。自由を享受するのみならず、ローゼンクランツとギルデンスターンは意識せずしてデンマークという牢獄の看守となる。ハムレットはそれを「考え方」の違い (there is nothing either good or bad, but *thinking* makes it so: to me it is a prison) と言うが、実はそれは立場の違いである。

ハムレットが二人に、自発的に (つまり友人としてのハムレットに会いたくて) 来たのか、それともクローディアスの要請で来たのか、と尋ねるとき、彼らは最初言葉を濁してはっきり答えない。もし彼らが本物の悪党だったら「自発的に来た」と即座に答えて、ハムレットを喜ばせもし、また自分を上手に守ろうとしたであろう。彼らの自己防衛はあまりにも拙劣である。この点についてはまたあとで論じる。

煮え切らない彼らの態度にハムレットは焦燥する。彼が執拗に問い詰めてはじめて彼らはクローディアスの要望で来たことを打ち明ける。友情が裏切られたことを知り、人間にたいするハムレットの幻滅はいっそうひどくなる。だからこそ、まさにここでかの有名な人間讃美とそれを否定する台詞(「この塵ちりのような人間がぼくにとって何だというのだ。こんなものは少しも面白くない。」)が聞かれるのである。そのような否定の原因となる (彼らだけが原因ではないけれども) 俗物が二人、ハムレットの厭世的台詞を聞きながら不審の面持ちでそばに立っている。もちろんそこにはアイロニーがある。

劇中劇の直後、ローゼンクランツとギルデンスターンは王妃の依頼でハムレットのところへやってくる。すなわち彼女がハムレットと話をしたがっている

という伝言をもって来る。第2幕第2場でこの二人と対面したときハムレットに生じたのは、友情にたいする失望と幻滅という消極的なものであった。ここで際立っているのはハムレットの激しい挑戦的攻撃的態度である。両場面のこの相違は劇のきわめて自然な進展を示している。この場面では39行もの長さになたって、ハムレットは彼らを存分に軽蔑し、容赦なく嘲弄する。コージンツェフの映画ではすこし趣が異なり、彼らはハムレットに王妃の居間に行くことを執拗にすすめ、「きちんとした返事がいただきたい」と食いさがり、ハムレットは次第に癡癡を募らせる。

ハムレットは王妃に会うことを承知し、「もう用はないかね (Have you any further *trade* with us?)」と言う。ハムレットと二人の間にはもはや“trade”の関係しかないことを彼は暗示しているつもりであろうか。それにたいしローゼンクランツは、「殿下は以前私を愛して下さいましたのに……(you once did *love* me)」とか、「友人に悩みを打ち明けて下さらない (you deny your griefs to your *friend*)」とか言う。第2幕第2場の場合よりも、偽善者の役をこなすことがはるかに上手になっている。ハムレットにとっては、自分を裏切りながら臆面もなく「愛」とか「友人」という言葉を使う偽善がたまらない。「世の中がまとも (honest) になった」などと言ったのはこの男自身ではないか。ローゼンクランツにたいする観客の嫌悪もここでたちまち最高点にまで上昇する。

じつは出世ができないからだ。

(3の2)

もちろんこれはハムレットが投げつけた挑戦状であって、不用意に洩らした言葉ではない。劇中劇の上演によって、すでにクローディアスの正体をハムレットは見破ったが、クローディアスもまたハムレットの本心を見抜いたのであるから、ハムレットは今さら後ろへ引けない。またハムレットにとって、クローディアスが自分の敵であることをもはや隠す必要もない。ただし「出世ができないからだ」というのはたんに部分的な事実すぎない。彼の「悩み」(griefs)

はもっと深い所に根があり、もっと多くの深刻な問題を包含している。諸事実全体の相互関係を無視して、他から切り離された一つの部分的事実のみを強調することは、事実全体の誤ったイメージを与えるものである。にもかかわらず「出世ができないからだ」と、誤解されることを恐れず（というよりむしろわざわざ誤解を招くように）あえて言っているのは、それがローゼンクランツとギルデンスターンのまさに聞きたがっていた答だからである。だから“while the grass grows”（草が生える前に馬は餓えて死ぬ、すなわち王位が自分のものになるのを待つ間に自分はどうなるかわからない）という諺の引用をもあわせて、王位の問題がハムレットの心を最も大きく占めていた問題だったと考えてはならない。ローゼンクランツは誤解してもよいが、われわれはその点を誤解してはいけない。

これらの2行はローゼンクランツとギルデンスターンという魚どもに投げられた餌でもある。コージンツェフの映画では、「しめた、やっとで秘密を嗅ぎ出したぞ……」とでも言いたげな会心の<sup>えみ</sup>笑をギルデンスターンがちらりと見せる。つまり餌に食いついたのである。もちろんその微笑をハムレットが見逃すはずはない。そこで彼は旅役者たちの一人に笛を持って来させ、ギルデンスターンにそれを吹いて見よと強要する。「吹いてくれ」「吹けません」という押し問答が繰り返される間、旅役者たちはすこし離れたところから固唾をのんで成行きを見守り、空気は緊迫し、ハムレットの語気は次第に鋭くなる。

君はぼくを何だと思っているのだ。君は笛の穴の押さえ方も知らないくせに、ぼくをうまく押さえることができるような顔をしている。ぼくの秘密を探り出そうとして、ぼくの最低音から最高音まで鳴らしたがる。……笛よりぼくのほうが扱いやすいと思っているのか。

(3の2)

見事なクライマックスである。

すぐ次の場面で、ローゼンクランツとギルデンスターンは誇張された比喩で阿諛の言葉をくどくどしく国王に述べるが、シェイクスピアはそれに17行も与

えている。コージンツェフの映画では、二人が国王をいかに恐れているか、またいかに彼の機嫌を取ろうとしているかがよく示されていた。大股で歩く国王のあとを、小走りにつき従う彼らの、屈んだ腰にも、国王を斜めに見上げる目付きにも、卑屈な媚が強調されていた。

ハムレットはポーニアスをクローディアスと間ちがえて刺し殺した。そこでクローディアスはローゼンクランツとギルデンスターンに「加勢の者を連れてハムレットを探しに行け」と命令する。だから二人がハムレットを探し出したとき兵士数人を当然のことながら引き連れているのであるが、彼らは完全に武装していた。ハムレットは凶悪な殺人犯であるからそうすることが必要であった。ハムレットは犯罪者として逮捕され、逮捕の指揮をしたのはかつての彼の学友たちである。（「犯罪」「逮捕」というこのイメージを、コージンツェフは第4幕第3場でさらに発展させている。）

海綿の比喩は、このように国王の道具となり、ハムレットにたいし公然と露骨に敵対し始めたローゼンクランツたちに投げつけられたものである。すなわち彼らは「国王の寵愛、恩賞権威を吸い取る海綿」であって、海綿に与えたものを国王が取り返したければそれを絞りさえすればよい。「そうすれば海綿である君は再び干からびてしまう。」すでに引用した笛の例でも そうであるが、ハムレットの比喩が敵を攻撃するのに用いられると、鋭くて痛快なほど切れ味がよい。

ハムレットがローゼンクランツとギルデンスターンに「連行」された宮廷の一室（第4幕第3場）には、国王の枢密顧問官たち（権力に寄生安住する他の海綿たち）全部が出席して、国王と一緒にハムレットを待ち構えていた。ちょうど裁判のような雰囲気である。ローゼンクランツとギルデンスターンは引き連れた兵士たちと部屋の入り口で警備している。「裁判」の結果、「被告」ハムレットをイギリスへ追放することは、クローディアスの個人的な計らいではなく、公的な決定という形になったのである。

次の場面は、デンマークのある港に近い平野で、これから乗船しようとするハムレットが登場する。彼には護衛隊がついており、その隊長はローゼンク

ンツである。もちろんギルデンスターンも同行している。この護衛はハムレットを守るためのものではなく、「既決囚」ハムレットの脱走を防ぐためのものである。

ローゼンクランツもギルデンスターンも性格の弱い人間で、時勢の流れを肯定的に受け入れて行くのであるが、他方から見れば、クローディアスによってデンマークの宮廷に呼び出されて以来、彼らはその流れに押し流されてゆくのである。おそらくそれまで平和な生活を何の屈託もなく送っていた彼らは、クローディアスの要請を受けたときから権謀術数の世界に巻きこまれ、彼らの運命は大きく狂い始める。志賀直哉の作品に『クローディアスの日記』という興味深い短篇があるけれども、ガートルードにもオフィーリアにもそれぞれ自分の「日記」がある。ローゼンクランツとギルデンスターンにしても、もし彼らの立場に立って考えるならば、彼ら自身の面白い「日記」があるかもしれない。

彼らは最初から意識的にハムレットを裏切るつもりだったのではない。彼らはエルシノアの政治的状況にひきずりこまれ、すくなくとも最初には心ならずもクローディアスの道具になったのである。しかし1979年に東京で観たプロスペクト劇団による『ハムレット』では、彼らの二人とも登場した時点から悪党めいており、最初からハムレットに不遜な態度をとっていた。

そのことがとくに目立ったのは、ハムレットがギルデンスターンに笛を吹いてみよと強要する例の場面である。コージンツェフの映画『ハムレット』では、緊迫した空気の中で、ハムレットに気おされてギルデンスターンがじりじり後退してゆく。この演出はギルデンスターンの性格の弱さのみならず、彼の後ろめたさをも暗示していた。そこではあきらかにハムレットのほうが優越していた。しかしプロスペクト劇団の場合は、この場面でギルデンスターンの大きく構えた態度には開き直ったふてぶてしさがああり、笛を吹いてみよとハムレットに言われてもそれを軽くあしらっていた。相対的にハムレットのほうは弱くなっていた。それどころか多少ヒステリックに振舞っているという印象すら受けた。

プロスペクト劇団の演出者は（おそらく自らは意識することなく）ある大きな問題に解答を与えている。ハムレットは直接間接に多くの人を殺しているが、すべての場合それは時のはずみによるものであり、激情にかられた結果である。<sup>(1)</sup>しかし彼がローゼンクランツとギルデンスターンとの（偽の）死刑執行令状を書いたときだけは、「時のはずみ」とは考えられず、意図的計算の行為であるように思われる。この点は、「新約の世界に住むキリスト教徒」とハムレットを定義したバーナード・ショーを当惑させた問題であった。その問題にたいする一つの答がこの演出である。すなわち二人が悪党であればあるほど、両者を死地に追いこむハムレットの行為は正当化されるからである。

このような演出にはもちろん難点がある。この二人とハムレットとの間には、若者らしい隔てのない友情がかつて（しかも長く）存在していたということは、テキストのあれこれの部分が明瞭に示している。それなのにそもそもの最初から彼らを悪党めいた人物として登場させるのでは、どうしても唐突な感じがするのである。言いかえると、そのような単純な演出はこの二人の人物の現実感（リアリティ）を希薄にするのである。

1980年に観た俳優座の『ハムレット』はまた別の演出を見せてくれた。ポローニウスを殺したハムレットは、王子の身分から殺人犯人の身分へとたちまち転落する。そのような見方が（あるいはすくなくともローゼンクランツとギルデンスターンはそのような見方をしているということが）この演出では露骨であった。ポローニウスの死をきっかけとして事態は急変し、ハムレットの立場も、彼にたいする人々の関係も大きく変化する。もはやローゼンクランツもギルデンスターンもハムレットを王子とは見なさず、まして友人とは見なさない。彼は重罪犯人であり、自分たちはその逮捕者である。

ハムレットを「逮捕」するときの場面は印象的であった。隙を見てハムレットの剣をさっと抜いて奪い取り、丸腰になった彼に二人は存分に暴力をふるう。一人はハムレットの首を締めつける。もう一人は彼を押し倒して足で踏みつける。彼らはハムレットに「復讐」するのである。この演出にはさらに面白い付録がつく。逮捕され無防備になったハムレットを、クローディアスはした

たかに殴ったりするのである。このことはあとになって、英国行きの船の中で、ハムレットが国王の親書を書きかえるという、例のいわば計画的殺人をプロスペクト劇団の場合よりももっと正当化することになる。

海賊たちによってエルシノアに帰されたハムレットは、ホレイシオにむかって「あの二人のことについては、ぼくの心に何の疚しい所もない」と言う。以上のような演出があれば、観客はこの台詞を納得するであろう。興奮から醒めたポーニアスを殺したとき、直後の興奮から醒めたハムレットの台詞

この老人のことは、後悔しています。が、これも天の思召し、この男によってわたしを、わたしによってこの男を罰するためでしょう、わたしは天に代って鞭を振うもの、同時に鞭打たれるものにならねばならない。<sup>(2)</sup> (3の4)

とは興味深い対照をなしている。ローゼンクランツ、ギルデンスターン、クロードィアスがハムレットに無慈悲で不必要な暴力をふるう場面は『座頭市』シリーズを思い出させた。主人公を迫害しておけば、あとで彼が復讐するとき、観客は爽快な気分になるわけである。

ローゼンクランツとギルデンスターンの死についてホレイシオに語るとき、ハムレットの良心はすこしも痛まない。その理由を私は次のように考える。イギリス国王に宛てたデンマーク国王の親書はハムレットの死を要請するものであったが、この親書の内容をローゼンクランツとギルデンスターンは恐らく知らなかったであろう。しかし「この二人は内々に叔父から聞いて手紙の内容を知りながらわたしを英国に護送しようとした」とハムレットが考えたとしても不自然ではない。彼は「この仕事を あいつらは自ら求めて引き受けた (they did make love to this employment)」と言う。前後の文脈を考えると、「この仕事」(this employment) という言葉は単にハムレットの護送だけを意味するのではなさそうである。すなわち「わたしを死地に送ろうとするクロードィアスの意を体してあの二人は行動していた」ということになる。バーナード・ショーを当惑させた問題の本当の解答は、実はそのあたりにあるような気



がする。

## (2)

この二人とハムレットとの間に最初から敵対的関係があったかのように考えることは、シェイクスピアのドラマツルギーを無視することになる。最初彼らにはハムレットにたいする彼らなりの善意があった。だから彼らに「自分たちはスパイだ」という意識はなかった。クローディアスが彼らに最初依頼したことは次のとおりである。

急に諸君を煩わさねばならぬことが起ったので  
とり急ぎ使いの者を遣わした次第だ。聞いたでもあろうが、  
近頃のハムレットの変貌、いやまったくそう言うほかはない、  
外から見ても、内から見ても、以前のハムレットとは  
まったくうって変った人間になってしまったのだからな。  
あれの父親の死以外には、あの男がこのようにまで  
理性の力を失うにいたった原因がありえようとは  
わたしも考えつかぬのじゃ。ついては君たちに頼みがある、  
君たち二人は子供の時分からあれといっしょに育って、  
あれの幼い頃からの気心もよく心得ているはずだから  
どうかこの宮廷にしばらくのあいだ滞在してもらいたい。  
なにかと、その間あれの相手になってやってな、  
いろいろな遊びにも誘い、また絶えずあれに注意して  
何かのきっかけを見つけて探り出してもらいたいのだ、  
何かあれにわたしたちの知らぬ悩みの種でもあるのか、  
またそれが見つかった場合、治療の手段があるか否かということをだな。

(2の2)

これらの言葉を額面どおりに解するかぎり、そこに政治的な意味は何もな

い。肉親としてハムレットのことを心配する当然な気持ちが表現されているだけである。グランヴィル・バーカーは「王位相統権を奪われたハムレットの秘密をどのあたりで探り出したらいいか、二人の柔軟な若い廷臣に教えてやる必要はクローディアスになかった<sup>(3)</sup>」と述べているけれども、ローゼンクランツとギルデンスターンはまだエルシノアに着いたばかりだということを彼は忘れていいる。「急に諸君を煩わさねばならぬことが起ったので、とり急ぎ使いの者を遣わした次第だ」とクローディアスは言っている。クローディアスのハムレットにたいする本心はまだ観客にすら示されていない。それはこれから漸増的に知らされてゆくのである。このときのクローディアスの本心は、われわれがあとになって振り返って知る。だからこの時点ですでに、ローゼンクランツとギルデンスターンがクローディアスの本心を見抜いていたとか、彼の言葉の裏にあるものを汲み取っていたとか、そのように決めこむのは穿ちすぎであろう。だからギルデンスターンの

神よ、願わくばわれわれの滞在が殿下のお慰めになり、

われわれの忠勤が殿下のお役に立ちますように。 (2の2)

という台詞も、彼の本音を表現したものと見なしてよい。つまりローゼンクランツもギルデンスターンもクローディアスの言葉を額面どおりに受けとったのである。『ハムレット』のように有名な作品になると、隠された事実が次第に現われてくる（すなわち作者によって expose される）過程と順序がとかく見失われがちになる。はじめてこの作品に接する人の立場に立つことが難しいのである。

ローゼンクランツもギルデンスターンもハムレットの旧友だったことを考慮するなら、彼らの知能はすくなくとも人並みであったと言える。愚鈍な者に王子の御学友という仕事は勤められない。愚鈍であるはずがないその彼らが——二人とも——「自分の自由意志で来たのか、それとも国王に呼ばれて来たのか」というハムレットの質問を少しも予想していなかったのは何故であろうか。彼

らはまだエルシノアに到着したばかりであって、そこでの状況がいかに複雑であるかを知らず、したがって、その状況の中で自分たちが果たそうとしている客観的な役割（彼らの主観的な意図が何であれ）をも充分には認識していなかったのである。換言すると、エルシノア的政治地図の中で自分たちの存在がもつ意味を理解していなかった。むしろ彼らは、ハムレットにたいする自分たちの個人的善意を本物だと信じていた。だから彼らはまったく無警戒無防備のままハムレットの前に出て行った。自分たちの行為がスパイ的だという認識が彼らにもしあったら、上述の質問を予想したにちがいないし、然るべき答を用意していたはずである。

ローゼンクランツとギルデンストーンがエルシノアに「自分で来たくて来たのか、それともクロードィアスの要望で来たのか」ということは、ハムレットにとって重要な意味をもっていた。しかし、それがハムレットにとって重要な問題だということに二人は最初気付いていなかった。それではいつ気付いたのか？ その質問が彼らにむけて発せられたまさにその時である。そのことが彼らの狼狽を二重にしている。「予期していてもよかったのに予期していなかった質問だ。しかもこれはかなり大変な質問だ……」と彼らは考えたにちがいない。

ハムレットのほうでも彼らに最初から敵意を抱いているわけではない。両者の関係はシェイクスピアの筆らしく、次第に発展させられる。

……使いをうけて来たんだな、そうら、顔にちゃんと書いてある。そ知らぬふりをされているほど君たちはまだ老獪ではないのだね。

You were sent for; and there is a kind of confession in your looks  
which your *modesties* have not craft enough to colour... (2の2)

J. D. ウィルソンは“modesties”という語に“sense of shame”という意味を与えている。だとすれば、この二人に「恥を知る心」がまだあるとハムレットは理解しているわけで、警戒心はもちろんあったとしても、かつての友人た

ちをすっかり憎んでいるのではないということになる。

この場面におけるローゼンクランツの台詞

この国を牢獄とお感じなるのは、殿下のご大望のせいでございます。  
お志に比べればこの国が狭すぎるのでございましょう。

は、ハムレットを陥れる罠だということになっている。しかしこの「ご大望 (ambition)」という言葉ははたして王位継承問題にそれとなく言及したものでしょうか。だとすればこの台詞の前半の意味は「王位を望む気持が実現しないので、デンマークが牢獄と感じられるのです」ということになる。そうすると「この国は殿下にとって狭すぎる」という後半にうまくつながらない。ハムレットが国王になったとしても「デンマークが狭すぎる」という事態は変化しないからである。すこし先に現われる同じローゼンクランツの台詞に

大望などというものはまことに空虚なもので、影の影にすぎないものだと  
私は存じます

とあるが、こうなると「大望」(ambition)は「王位を望む気持」という意味からますます遠ざかるような気がする。むしろローゼンクランツは ambition 一般を指してそれが無意味無価値であることを言いたかったかのようである。そのことはギルデンスターンの台詞

ご大望の本質は結局夢の影にすぎませんからな。

についてもあてはまる。

ハムレットとたった一度対面しただけで、ローゼンクラッツとギルデンスターンは重要なことを知った。すなわちエルシノアにおける自分たちの位置をかなり明確に判定できるようになった。彼らの認識はその後次第に深められてゆ

く。

劇中劇の王を毒殺するのは王の甥である。ハムレットは現国王の甥であるから、そこには平行関係がある。クローディアスの犯罪（先王を殺害したこと）について何一つ知らない廷臣たちは、J. D. ウィルソンも指摘するように、この劇中劇をクローディアスにたいするハムレットの脅迫と解した。ローゼンクランツとギルデンスターンも例外であるはずがない。

劇中劇が中断され、大広間から廷臣たちは興奮した国王に従って退出する。退出する者はすべてクローディアスの味方で、残る者はハムレットの味方である。一瞬のためらいもなくローゼンクランツとギルデンスターンは国王のあとを追ひ、ハムレットのそばに残るのはホレイシオと旅役者たちだけである。エルシノアにおける敵味方の関係が空間的に紛れなく示される劇的な瞬間である。政治的に孤立無援なハムレットの立場があまりにも痛々しく明瞭になる。

間もなくローゼンクランツとギルデンスターンは王妃の言葉を伝えるためにハムレットのところへ戻ってくる。そのときの対話はよく問題になるところである。

ローゼンクランツ それなら、いったい殿下の御不快の原因は何でござい  
すか？ 友人ならそのお悩みをお打ち明け下さいませぬか。隠すのはかえ  
って殿下のおためにならんのではないでしょうか？

ハムレット じつは、出世ができないからだ。

ローゼンクランツ これはまたどうしてでございます。王さまはおんみずか  
ら殿下こそ次のデンマーク王とご宣言あそばされたではございませんか？

ハムレット それはそうだが、「草が生える前に馬は餓えて死ぬ」——いや  
この諺はすこし古くさいな。

(3の2)

前にも述べたように、この諺によってハムレットが言いたかったことは、「自分が王になれる前に何が起るかかわからない」ということであった。。J. D. ウィルソンはこの対話について次のように述べている。ハムレットは「自分の順

番が来るのを待つつもりはなく、自然の成り行きを行動によって出し抜くつもりである。だから国王暗殺（ハムレットがクローディアスを殺すこと）の問題をもち出したのはハムレットが先であってクローディアスではない。<sup>(4)</sup>この対話そのものからはそのような結論は出てこない。しかしこの対話が劇中劇（その中で王が甥に殺される）の直後に置かれたという事情によって、つまりコンテキストによってそのような結論が出てくる。すなわちハムレットの台詞はここではクローディアス暗殺を仄めかすことになる。そしてローゼンクランツもギルデンスターンも、ハムレットの言葉をそのような仄めかしとして受けとったことになる。この時点から彼ら二人には後めたさがすっかりなくなり、ハムレットからの離反は完全に正当化される。

彼らがハムレットを「逮捕」するとき、彼を乱暴に扱うということは十分にありうることである。むしろそれは自然なことかも知れない。しかしそれは二人の性格が善人から悪人へと変化したためでもないし、もちろん最初から悪人だったためでもない。それはまず第一に、エルシノアにおけるハムレットの立場が変化したからである。かつてすべての人に敬愛されていた彼は、結局狂気じみた危険人物となり、犯罪者となり、孤立無援の弱者となる。それにつれてかつての学友たちは、ハムレットの本心を探り出す役割、彼を犯罪者として逮捕する役割、彼を死地に護送する役割、などを順次引き受けてゆく。彼らの性格が変化するのでなく、ハムレットにたいする彼らの関係が変化してゆく。彼らに後めたさがなくなるところか、ハムレットに公然と敵対する大義名分すら生じてくる。それならば、社会的弱者となったハムレットにたいし露骨に強者として振舞うことほどこの二人にふさわしいことはない。

ローゼンクランツとギルデンスターンを単純な悪人に仕上げていないという、まさにその理由でこの二人の人物には見事な実在感がある。

（注）

（1） *Shaw on Shakespeare* (edited by Edwin Wilson), p. 76.

（2） 以下引用文はほぼ三神勲氏の訳による。

（3） Granville-Barker, *Prefaces to Shakespeare I*, p. 72.

（4） J. D. Wilson, *What happens in Hamlet*, p. 168.